



# 静寂の楽園

## 【第1章】

櫻宮まじゅ

## 静寂の楽園【1】

---

高校2年生の山川碧衣は、毎日の生活に息苦しさを感じていた。

「ねえ、学級委員長ー！今日の掃除当番、代わってくんない？」

ホームルームが終わり、帰ろうとしていた碧衣の元にクラスのリーダー格の女子、九条世良が満面の笑顔で寄ってきて、頼み事をされたのだ。

断ろうにも、世良の周りにいる数人の取り巻き達が「どうせ暇でしょ？」「学級委員なんだから、みんなの役に立つのが仕事じゃない」と口々に責めるように言ってくるため頷くしかないのだ。悲しい事に、これは彼女にとっては日常の一部にすぎない。

梅雨に突入した6月。この日も朝から空は曇り、今にも雨が降り出しそうな天候。誰もいなくなった教室で、碧衣はため息をつきながら1人で掃除をした。手伝ってくれる人は誰もいない。

彼女が学級委員長を務めるのは、これで二度目。去年も今年も、彼女はクラスメイトに推薦されて、学級委員になったのだ。

碧衣に人望があるというわけではなく、ただ単に面倒な事を押し付けられただけ。実際、彼女は学級委員だからという理由でクラスの人達にパシられてばかり。

特にスクールカーストの上位に位置している世良は碧衣にあれこれ命令し、時には陰湿な悪口を言ってくる事もある。

世良は茶髪の長い髪の毛を緩く巻いており、顔もぼっちりメイクを施し、制服もおしゃれに着崩している。一方の碧衣は肩より少し長い黒髪に、きっちり着こなした制服、メイクもしておらず顔立ちは至って普通。秀でたものが特にあるわけではない。

掃除を終えて帰る頃には、雲行きが怪しかった空に少しだけ晴れ間が見られた。

「んー、やっと学校が終わった……」

伸びをして、いつも通り家までの道を遠回りして歩いた。彼女にとって、家も安らげる空間ではなかった。

碧衣の家は両親が3歳の時に離婚。母に引き取られる事になったが、母は頻繁に若い男を家に連れ込むようになり、「あっち行ってなさい」といつも碧衣を邪見に扱った。

現在、母は再婚しているが、その再婚相手というのが無職で昼間から酒を飲み、パチンコや競馬などをして遊び歩いている、どうしようもないヒモ男だった。母が夜にキャバ嬢として働いているので、生活は苦しいがどうにか成り立ってはいる。

碧衣は、継父の事が非常に苦手であった。継父はしょっちゅう「不愛想で可愛くない」「服がダサい」「お化けみたいな奴」などと何かと理由をつけてキツイ口調で罵ってくるのだ。更には母がいない夜に「胸だけは立派だ」と言って体を触ってくる事もあった。

母は相変わらず碧衣に無関心で口を開けば「邪魔」と粗末に扱うだけ。

碧衣は内心思っていた。

「こんな毎日を、変えてくれる人が現れないだろうか」と、切に……。

土手沿いの道を一步一步とのんびり歩き、ふと足を止める。

碧衣は少し仰け反るようにして、転ばないように注意しながら土手を下りた。土手を下りたところには、河原がある。

スクールカバンを置いて、足元に落ちていた石を拾った碧衣はそれを思い切り川に投げつけた。それを二度、三度と繰り返したのち、大きな声で叫んだ。

「もうっ、大嫌いっ!!いつもいつも命令ばっかして!!いつも、邪魔者扱いして.....何で私ばっか、罵られないといけないのよっ」

周りに人がいないのをいいことに、学校や家に対しての不満を吐き出した。これで鬱憤が全てなくなるわけではないが、声に出して叫んだ声でほんの少しだけ気休めになった。

「へーえ、いいねえ。大人しそうな外見して、意外と言うねえ」

誰もいない、と思い込んでいた彼女の背後から男の声がした。ビックリして振り向くと、土手を上がったところに自分と同じ年くらいの男の子が立っていた。

遠目から見ても、顔立ちは綺麗に整ってるのがわかった。サラサラした黒髪が、風で微かになびいている。

「あれ、もうなんも吐き出さないの？醜い本音を思い切り曝け出す健気な少女の姿、面白かったのになあ。もっと僕を楽しませてよ、もっと醜い本性を曝け出してよ」

自分を見下ろしながら呟くその姿は、まるで碧衣の事を心底馬鹿にしているように見えた。しかしそれ以前に、情けない姿を人に見られてしまったのだ。全身が発熱するくらいの羞恥と、彼に対する苛立ちで碧衣は頭の中が乱れていた。

(どうしよう、今の聞かれた.....最悪。あの子、いつからあそこにいたんだろう.....)

碧衣が悶々と考え込む姿を見て、

「相当、鬱憤溜めてるんだね。もし機会があれば、じっくりキミと話がしたいよ」

男の子はクスクスと小さく笑った後、颯爽とその場を去って行った。

「何だったんだろう.....あの子」

遠ざかっていく彼の後ろ姿を見つめ、碧衣はため息交じりに呟いた。

「ただいま.....」

家に帰ると同時に、タイミング悪く、母がリビングから出てきた。これから出勤するようで、派手な衣服を身に着け、顔にも濃い目のメイクを施している。

「.....あんた、最近ずーっと帰りが遅いわね。ったく、どーせ友達と遊び歩いてるんでしょ？」

皮肉じみた母の言葉が、リビングで酒を飲む継父に聞こえたらしい。

「馬鹿だな、お前！こいつに、一緒に遊ぶ友達がいるわけねーだろ！」

玄関にいる碧衣に聞こえるように、わざと大声でそう言ったのだ。母は「それもそうね」と同意し、「邪魔よ」と、ひと睨みして仕事に出かけて行った。

「おい、何で真っ直ぐ家に帰ってこねんだよ！」

母が出たと同時に、リビングから出てきた継父は酒の匂いを漂わせながら迫ってきた。

「べ、別に……」

「相変わらず不愛想だな～。可愛くない娘持つと、ストレス溜まるぜ～」

（娘？違う。私は、あなたとは血が繋がってない。私はあんたなんかの娘なんかじゃないっ！  
違うっ！）

心の中で、碧衣は叫んだ。しかし、どんなに目一杯叫んだところで、心の叫びは誰の耳にも届く事はないのだ。

「なあ、そんな不愛想じゃ、社会に出て苦労するぞ～？って言ってもまあ、どーせ困るのはお前だし！俺には関係ねーけど！はははっ！」

継父の下品な笑いが響く中、碧衣は声が聞こえないよう両手で耳を押さえ、2階へと続く階段を駆け上がった。

また明日も、今日と同じような1日が待っている。そう思うと気が遠くなるばかりで、涙すらも出てこない。

慣れた日常だから、泣く気力さえも起きない。

それから1週間ほど経過した日の事だった。

「山川！ちょっと職員室に來い」

ホームルームが終わって、碧衣は担任の先生に職員室に呼ばれた。どうせまた雑用だろう、と察しができた。職員室に行くと、担任は大き目の茶封筒を渡してきた。

「これを、宮内圭太の家まで届けてほしい」

そんな名前のクラスメイト、いただろうか？頭をフル回転して考えてみるも、宮内圭太という人物がどんな顔をしてるか想像できない。

「2年生に進級してから、ほとんど学校に來てない奴でな。來ても、授業も受けずに保健室で寝て過ごしてるんだ」

ようやく碧衣は思い出した。いつもいつも学校を休んでる人物が1人いた事に。

「これがあいつの家までの地図だ。プリント渡すついでに、言っといてくれ。たまには学校に來いってな」

「……わかりました」

勝手に行くこと前提で話を進めるため、断る余地がどこにもない。無論、断る権利なんか恐らく与えられていないだろう。

宮内圭太がどんな人かもわからず、憂鬱な気持ちで碧衣は学校を出て、地図を頼りに彼の家を目指した。

30分くらいで、彼の家に到着した。ドラマに出てくるような、洋風の大きな家……否、屋敷だった。

（お金持ちの人なんだ……）

急に緊張が襲ってきた。深呼吸して、インターホンのボタンを押した。しかし、いくら待っても反応がない。留守かも、と解釈した碧衣は封筒をポストに入れようとした。

まさにその時だった。玄関のドアが突如として開いた。

「どちら様？」

中から出てきたのは、初対面であるはずなのに見覚えのある顔で、聞き覚えのある声の人物だった。

「あっ、あなたっ……」

「おや、君は……」

碧衣は思わず茶封筒を持つ手に力が入った。ガラにもなく、大きな声も出た。

何故なら、家から出てきたのは紛れもなく、河原で絶叫していた碧衣に声をかけてきた挑発的な態度の人物だったからである。

双方にとって、まさに予想外の再会。

「あ、あなた、宮内くん、ですよね？」

「そうだけど」

「これっ！プリントですっ！先生から届けるようにと言われたのでっ……ではっ！」

届け物を済ませ、さっさと帰ろうとした碧衣だったが、それを引き止めるように、圭太はさすがその腕を掴んだ。

「せっかくだから、ゆっくりお茶でも飲んでいくといい。どうせ僕以外、誰もいないから」

「いえ、帰ります……」

「時間あるよね？ここは素直に、応じるべきだよ？」

結局、断る事ができず碧衣は渋々、応じた。

「どうぞ」

案内されたリビングらしき広い部屋で、いかにも上等そうな椅子に座った碧衣の前のテーブルにはティーカップに注がれた湯気のたつミルクティーが出された。

(これを飲んだら、さっさと帰ろう……)

碧衣は圭太に対して警戒心のようなものを抱いていた。彼がどんな人物なのか、全く掴めないからだ。学校に来てないとはいえ、どう見てもいじめられて不登校になったようなタイプではない。

「ねえ、聞いてもいいよね？君さ、こないだ不満を吐き出してたけど」

口を開いたかと思えば、圭太は早速この間の出来事を話題にしてきた。碧衣は眉をひそめ、「それが、何？」と素っ気ない口調で返した。

「君ってもしかして、死にたいとか、思ってる？」

飲んでいたミルクティーを嘔き出しそうになった。ティーカップを置いて、少し視線を泳がせた後、碧衣は言った。

「ありますよ……何度かは。いっそ、死んでしまいたいって思った事くらい……」

「へーえ。そう」

自分から聞いたにも関わらず、圭太の反応はドライだった。

「毎日に、そんなに不満を抱えているんだね。君は実に可哀想な子だ。本当に……」

圭太は少し身を乗り出して、碧衣の髪の毛に触れた。その動作に驚きながらも、距離が近くなった事に碧衣の胸はほんの少し高鳴った。

「私、もう、帰ります」

ここに長居したら、心臓が持たない。立ち上がった碧衣はカバンを抱えて、リビングを出た。

その後を追いかけてきた圭太は「待って」と言葉で彼女を引き止めた。

「名前、教えてもらってないから、教えてくれるかな？」

「山川碧衣です……」

「そう……それじゃあ明日も、ここに来てくれるかな？待ってるから」

さすがに、碧衣は断ろうとした。2日連続で行くなんて、気が向かない。だが、圭太が不気味なくらいのニコニコ顔で「待ってるね、山川さん」と念押しのように言ってきたので、首を縦に振ってしまった。

本当は彼と関わるのは、極力避けたかったが、この間の事を誰かに口外されても困るので、ここは大人しく従うしかないと思っただけだ。

翌日は、当たり前のようにやってきた。

「ちょっとー！これ、私が頼んだやつと違うじゃない！」

昼休みに、碧衣は世良に「牛乳を買ってきて」と言われたので、購買に行って牛乳を買った。教室に戻って、それを世良を渡すと何故か怒られたのだ。

「私、牛乳の気分じゃないんだけど～」

「でも、あなたがそれを買ってこいって……」

「だーかーら、こんなもん、頼んでないって言ってるでしょうがっ！この役立たず。お使いさえ、まともにできないなんて」

一方的に罵った後、世良は席を立ち、紙パックの牛乳を碧衣の頭上で思い切り握り潰した。まだ中身の入っている牛乳はストロー差し込み口から外へ飛び出し、碧衣はそれを頭から浴びてしまった。その瞬間、教室中に牛乳の匂いが広がった。

「うわっ！くっさ！」

「ちょっと学級委員長！何やってんの！」

「最悪ー！そんなもの、零さないでよ」

一斉に批判が飛び交うが、それらは全て世良ではなく碧衣に向けられていた。

「やだ～。手に牛乳が少し付いちゃった～！洗ってこよーっと」

世良は涼しい顔して、取り巻き達と教室を出て行った。

碧衣は雑巾を持ってきて、濡れた床を拭いた。自身の体から牛乳の匂いを漂わせ、クラスメイト達の冷たい視線を浴びながら……。

放課後になり、碧衣は気が進まないながらも圭太の家へと向かった。

髪の毛も制服も牛乳臭いまま。体操着に着替えようとしたが、世良達がどこかへ隠したようで

不可能だった。

30分ほど歩いて到着。インターホンを押すとすぐ玄関扉が開いた。

「こんにちは、山川さん。待ってたよ」

「……どうも」

圭太は玄関扉を大きく開き「どうぞ」と、碧衣を促す。

「お邪魔します……」

碧衣が中に入った途端、玄関に、微かに牛乳の匂いが広がった。圭太は不思議そうな顔で彼女を見つめ、右手で口元を覆って考える動作をした後。

「山川さん、先にお風呂に入ろうか」

と、提案した。

「いいです。今日はやっぱ、帰ります……」

「ダメ。僕はキミと話したいから、キミをここに招待したんだ。でも、まずはお風呂に入って、少しベタベタした髪の毛を綺麗に洗った方がいい。制服も洗濯しないと」

強引な圭太に乗せられて、碧衣はお風呂を借りる破目になった。

「はい、バスタオル。制服は洗濯するから、お風呂の後はこれに着替えて。脱いだ制服は洗濯機の中に入れておいてね」

渡されたのは水色のバスタオルと淡いピンク色のワンピース。一旦は受け取ったそれを、碧衣は圭太に突き返した。

「着替えは、いいです。こんなの、着られません」

(私には、似合わないもの。ピンク色の服なんか……)

暗い表情で服を突き返してきた碧衣に対して、圭太は何も言わずにリビングから出て行ってしまった。

すぐに戻ってきた彼の手には、今度は黒い服が。

「これなら、いい？」

「……はい。ありがとうございます」

着替えを受け取り、圭太は碧衣を風呂場まで案内した。

広々とした綺麗な浴槽の中には、紫色のお湯が溜めてあった。浴室全体に、ラベンダーの香りが広がっていた。

なんだか落ち着かなくて、碧衣は体と髪の毛をさっさと洗ってバスルームを出た。

風呂から上がり、リビングに行くと圭太はキッチンにいた。

「宮内くん、長湯しちゃって、ごめんね……」

「ううん、全然いいよ。その辺に、適当に座ってて」

碧衣は部屋の隅に腰を下ろした。キッチンから、こっちへやってきた圭太は隅に座っている碧衣を見て「どうして、そんな所にいるの？」と笑った。その両手にはマグカップが握られている。

「はい、どうぞ。カフェオレだよ」

マグカップを碧衣に手渡し、圭太も隣に腰を下ろした。おまけに、体をピッタリくっつけるようにして座っている。

(距離、近い……)

碧衣はドキドキして、緊張しながらマグカップのカフェオレを一気に飲み干した。

「とても似合ってるね、山川さん。その服」

「え、そ、そうですか？」

今、着ているのは黒いワンピース。腰のところにはリボンが付いており、丈は膝より少し上。碧衣は「このワンピースは少し大人っぽくて、私には似合わない」と思っていた。

「宮内くんって、お姉さんがいるんですか？」

「いないよ。その服は、母のだよ。だから少し、山川さんには大きいかな」

そう話す圭太の横顔は、微かに複雑そうに曇っていた。

「ねえ、一応、同じクラスなんだから。タメで話をしよう。敬語はいらないよ」

「……うん」

「とは言っても、僕は2回ほど留年してるから、年齢は君より2つ年上だけどね」

衝撃的な情報を圭太はサラッと暴露した。碧衣はどういうリアクションをすればいいかわからず、黙ったまま視線を手元に集中させた。

(2回も留年してるって事はつまり、19歳!?年上だったんだ……でも、何でそんなに留年を……)

動揺している碧衣に、急激に猛烈な睡魔が襲ってきた。瞼が重くなって、睡魔を紛らわそうと、両手で頬を軽くペチペチ叩いた。

「山川さん、眠たくなっちゃった?だったら少し眠るといいよ。ベツトルームに行こうか」

圭太は立ち上がって、右手を差し出した。碧衣は「平気だから、いいよ」と言って自粛した。

「しょうがないな」

独り言のように呟いた後、圭太は軽々と碧衣をお姫様抱っこしたのだ。抵抗しようとする碧衣だが、押し寄せる睡魔のせいで体が動かない。完全に、圭太に身を預ける状態になっていた。

(……恥ずかしいけど、なんか、温かい)

羞恥を感じていたはずの碧衣だが、体から圭太の温もりが伝わってきて、少々心地よさを覚えてしまった。

碧衣は圭太の腕の中で、すっかり眠りに落ちてしまった。

次に目を覚ました時、碧衣は大きくてフカフカのベッドの上にいる。すっかり日は落ちてるようで、室内は暗かった。ただ、カーテンの隙間からほのかに月明かりが漏れていた。

「あれっ、ここって……確か私、宮内くんの家に行って、それで……」

記憶を辿っていると、部屋のドアが開き、電気が点いた。照明の眩しさに目を細めた。

「起きた?山川さん」

「今、何時？」



「丁度9時だよ。ごめんね。山川さんがあまりにも気持ちよさそうに眠ってたから、起こすのが可哀想で」

「迷惑かけちゃって、ごめん。私、もう帰らないと……」

今帰れば、母は仕事に行って家にいないが、継父は相変わらず家で酒を飲んでいるだろう。こんな時間に帰宅すれば確実に継父に罵られるに違いない。

(……帰りたくない)

布団を無意識のうちに握り締め、視線を圭太から逸らして、意味もなく部屋を見渡した。

「……山川さん、よかったら、ここに住まない？」

「えっ!!」

思わぬ提案に、これまでにないくらい大声が出た。圭太の表情はさっきと変わらず、余裕ありきな笑みを浮かべている。冗談のつもりだろうか。

「……山川さん、僕の言ってる事をあまり理解できてないようだから、もう一度だけ言う。もう、家には帰らなくていい。ここで、僕と一緒に暮らそう」

知り合っ間もないはずのクラスメイトから、唐突に持ち掛けられたのは、まさかの同居。

「悪い冗談で、私を困らせて、楽しんでるの？」

挑発的な事を平気で言う圭太の事だ。冗談を言って戸惑わせて、心の中で楽しんでるのかもしれない。棘を添え、言葉を返した。

「僕はキミを困らせるつもりはない。ただ、家に帰らず、ここにいる方がキミにとっては好都合なんじゃないかな？本当は家に帰りたくないんだろう？帰る、と言った時、無意識かもしれないが、すごく辛そうな顔をしてた」

(宮内くんに、見破られている？)

「この家で僕は今、1人で住んでいる。経済面は心配しなくていい。もちろん、何ひとつ不自由はさせない。それに……キミが心に負った傷だって、きっと僕なら癒せる」

差し出された右手。

碧衣がチラリと圭太の顔を見ると、目が合って、穏やかに微笑んでくれた。

人からこんな風に優しくされたのは、随分と久しい気がする……と、碧衣は少し泣きそうになってしまった。

「私がいたら、邪魔になるんじゃないの？」

「邪魔だって思うなら、最初からこんな提案しないよ。さあ、どうする？山川さん」

厚かましいと思いつつも、碧衣の答えは決まっていた。

「よろしくお願いします」

目の前の、圭太の右手をそっと握った。繋がれた手からは、お互いの温もりが痛いくらい伝わってきたのだった。

奇妙な成り行きでスタートした2人の同居。

「山川さんは、この部屋を使って。欲しい物があったら、遠慮なく言ってね」

案内されたのは寢室の隣の部屋。そこにはベッドがあり、ドレッサーがあり、広々としたウォークインクローゼットまであった。カーテンとカーペットは淡いピンク色で統一されている。

「この部屋、私が使うには、もったいなさ過ぎるよ」

「……そんなつまらない事、いちいち気にしないでいいよ。自分の家だと思って、存分にくつろいで」

碧衣は改めて、部屋を見渡した。

(……いかにも女の子らしい部屋。まるで、あらかじめ用意されてたみたい)

「さ、夕飯にしよう。おいで」

圭太は碧衣の手を握った。積極的なスキンシップに、戸惑うばかりだった。

リビングに行くと、テーブルの上には2人分のオムライスが用意されていた。

「宮内くんが、作ったの？いつの間に……」

「うん。ご飯は自分で作ってるから」

ルックスが良いだけじゃなくて、料理までできるなんて……と碧衣は「まるで月とスッポンだ」と微かな劣等感を抱いた。

圭太のお手製のオムライスは、作って時間が経過したのか、少し冷めていたが文句なしの絶品の味だった。そもそも碧衣はいつも残飯しか食べさせてもらえなかったので、久々のまともな食事だったのだ。

少し遅い夕食を終え、碧衣は再び部屋の隅に座った。

「またそこに座るの？よっぽど、そこが気に入ったんだね」

「私には、隅がお似合いだから……」

圭太は「へーえ」と呟いた後、碧衣の体をひょいっと軽々持ち上げ、お姫様抱っこをした。そして碧衣をフカフカのソファの上にゆっくり下ろした。

「これからは、隅でコソコソしないでいいよ？胸を張って、堂々としていればいい。だってここには、僕しかいないんだから。キミを否定する奴はいないんだよ？」

挑発的でも、からかう風でもない。ただ、心地の良いトーンの声が耳に響いた。最初は苦手意識があったはずの圭太相手に、碧衣はほのかに安らぎを感じた。

ただ、知り合って間もない圭太が何故ここまでしてくれるのか、理由が見つからない。何のメリットも得られないだろうに。

圭太がお風呂に入ってる間、碧衣はベツトルームにいた。別々に寝るとばかり思っていたが、これからはこのベツトルームで一緒に寝るらしい。

もちろん圭太は「何も手出しはしないから」と笑いながら言った。それを信用していいかは微妙なところだ。

(これから宮内くんと暮らすのか……どんな生活が待ってるんだろう)

碧衣は不安を覚えていたが、同時に安堵する気持ちもあった。もうこれからは、あの家に帰らなくて済むのだ。不謹慎だが、心が大いに軽くなった。

ふと、ベツトルームには広いバルコニーが付いてる事に気づいた。碧衣は何気なく、バルコニーに出てみた。真っ暗な空には三日月が浮かび、所々で星が輝いていた。

(風、ちょっと冷たいけど、気持ち良いかも……)

強い夜風が吹き抜け、髪の毛がなびいた。

「そんなところにいたの？体、冷えちゃうよ？」

「あっ……宮内くん」

急に声をかけられ、少々驚いた。振り向けば、風呂上りで髪を濡らし、頬を火照らせた、色気を帯びている圭太の姿があった。

「今日は、少し風が冷たいね……」

碧衣の横に並び、圭太も同じように空を見上げた。流れる沈黙に、碧衣は緊張感を抱きながらも、恐る恐る圭太の横顔を見つめた。すぐに視線に気づいたようで「ん？」とこちらを向いた彼と目が合った。

「宮内くん……どうして……何で、知り合って間もない相手を、家に住ませようと思ったの？私に親切にしても、得する事なんか何もないのに……」

「確かにそうかもしれないけど……」

バルコニーの手すりに持たれかかりながら、圭太は間を置いてから答えた。

「損得は関係ない。僕はただ、キミに惹かれた……それだけだよ」

「……え、それって」

「一見、大人しそうで従順そうな子なのに、実は心に闇を抱えて、誰もいないところでそれを赤裸々に吐き出す……そんなキミにどうしようもなく惹かれた。それだけの事だよ」

圭太の言葉の意図は、イマイチ理解できなかった。しかしこの日、碧衣の世界が急激に変わり始めたのは確かだった。

2人の世界は人知れず、静かに幕を開けたのだった。

【第2章へ続く】

<http://p.booklog.jp/book/110470/read>